宇宙生命哲学 ことはじめ

73

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

平和という時空間の尊さ

イスラエルとパレスチナのイスラム組織ハマスの紛争が始まって1年3カ月。ガザ地区は壊滅状態となり、両陣営を合わせて4万人を超える死者が出ている。イスラエルは、隣国レバノンやイランにも攻撃を仕掛け、中東全体が戦火に包まれる恐れが高まっている。長い歴史の中で、困難な問題を孕んでいるパレスチナ問題を放置してきたツケが、今、国際社会に突きつけられていると言えよう。私たちは、未来の子どもたちに引き継ぐべき、平和につながる国家像を示せるのだろうか。

私は、米国・イェール大学医学部在職中の1979年に、イスラエルを訪れる機会があった。国際神経化学会での研究発表のため、1歳と5歳の子供を連れ、家族4人でテルアビブ空港に降りた。72年のテルアビブ空港乱射事件以来、日本人に対する入国審査は厳しかったが、子連れの家族には寛容であった。ホテルに1泊して、次の日の早朝海岸を散歩した。6時頃だというのに、海岸は海水浴を楽しむ市民でごった返していた。話を聞くと、この時は、イスラエルの建国以来、最も安定して平和な時であり、苦労して手に入れた平和な時間を心ゆくまで楽しんでいるという。泳いだ後は朝食をとり、会社に出かけて仕事をし、帰宅してからも余暇を楽しむとのことであった。まさに、平和という食べ物を、骨の髄まで貪っている様子である。この環境を手に入れるのに、どれだけの対価を払ったのだろうか。この平和な時空間を保つのに、これからどれだけの代償を払うのだろうか。私も、海に入った。地中海の水は生暖かく、温泉に入っている感覚がした。この民族はこれからどこを目指して行くのだろうかと複雑な気持ちでテルアビブを後にし、イエルサレムに移動した。

テルアビブのホテルから地中海を望む
1979年8月　筆者撮影

イエルサレムでの学会の空き時間を利用し、レンタカーを借りて死海までドライブした。レンタカーは日本車のスバルが多かった。砂漠の道路には、辻々に自動小銃を肩にした警備員が配置されていたが、身の危険を感じることはなかった。死海では、体が風船のように水に浮く体験もした。ヨルダン渓谷を挟んで、ヨルダン側が荒涼とした砂漠であるのに対し、イスラエル側は緑が生い茂り、近代技術の成果に目を見張るものがあった。ヨルダン側の人々に、この光景はどのように映っていたのだろうか。

今回の紛争は、イスラエルとガザ地区だけの問題ではない。人類全体が本気で取り組まねばならない大きな課題だと思う。